

〈連載⑥〉

## 新鋭離島航路船「太古」の旅



大阪府立大学船舶工学科助教授

池田良穂

11月に 横浜で開かれた造船関係の学会の折り、名門旅客船会社関西汽船の元工務部長として多くの名船の設計に携わった埴友雄先生にお会いした。一時、筆者の勤める大学に非常勤講師としてお出で頂いていた頃はよくお会いし、船の話しをいろいろ伺ったものだが、最近は何回お目にかかるだけとなっている。

埴先生はおもむろに胸のポケットから一枚のコピーを取りだされた。その紙には、関西汽船の「あいぼり丸」と、もう一隻なかなかモダンな外観の客船の写真が並べられていた。「あいぼり丸」は別府航路の最後の観光客船として建造された姉妹船の一隻で、埴先生の設計した傑作船の一つ。この夏ついに引退して、瀬戸内海航路から定期純客船が姿を消した。その淋しさを話されるのかと思いきや、先生の目はきらきら輝いている。

「実は、この下の写真の船は、最近僕が設計に携わった野母商船のフェリーなのだが、船体抵抗を減らすことができ、あいぼり丸クラスと比べると30%近く主機の馬力を減らす事ができたんだよ。船内の設備も離島航路にしては画期的なほどグレードも高い。一度乗ってみて下さい。」一気にかこう話された。

野母商船の 会社名を聞いて、すぐにその航路が分かる人はかなりの内航客船マニアか、地元の人に限られる。自称内航客船ファンの筆者は、自慢ではないが、いままで2回ほど野母商船のフェリーに乗っている。博多を深夜に出港し、平戸、生月島に寄港、さらに五島列島の各港を点々と寄港して、五島列島の中心である福江まで行く。「フェリー太古」と「フェリー清信」の2隻で毎日一便のサービスを行っていた。まさに離島の生活を支える航路で、船には観光船らしい施設は全くなく、缶ビールとカップヌードルを食べながら、博多～福江間の航海をした記憶がある。最後に乗船したのが、もう十年以上前のことであるから、しばらく御無沙汰してしまっている。ただ、乗船はしていないものの出会いは時々ある。この10月にも、博多港からクルーズ客船「ソングオブフラワー」に乗船した時にも、姉妹船のいずれかは判らないが、博多埠頭に停泊しているのを遠目に見て、まだがんばっているのだなとエールを送り、カメラにしっかりと納めた。これが筆者にとっては、この姉妹船との最後の出会いとなったこととなる。

**横浜の** 学会から戻って、スケジュールとにらめっこ。11月の末の週末ならば時間がなんとか取れる。さっそく野母商船に電話をしてスケジュールと空き具合を聞いた。電話口の女性は、「この頃ならキャビンも十分に空いています。仮押えをしておきますので、乗船前日までに博多の窓口で切符を買って下さい。」とのこと。「大阪なので、切符を買いに行くのは無理なのですが」と伝えると、女性は一瞬絶句。大阪からわざわざ乗りに来る人は珍しいのかもしれない。しばらく、会社内で相談していたが、結局乗船前に乗場の切符売場で乗船券を買うことでOKということになった。



金曜日、大学の仕事を早目に切上げて新幹線に飛び乗る。約3時間で博多に到着。乗船は9時半からとのことだったので、駅前で食事をした後、タクシーで博多埠頭の乗場へ。この一画は再開発されてベイサイドプレイスという洒落たウォーターフロントに生まれ変わっている。岸壁には新造まもない「太古」が光りを煌々とともに停泊

している。総トン数は1,260トン。離島航路船としてはなかなかの大きさだ。船首部分のデザインも最近のクルーズ客船の流行を取入れている。

まず船内に入って驚いた。最近はやりのインサイドプロムナード、ゆったりとしたラウンジ、さらにカラオケルームまで、パブリックスペースの充実ぶりとはとてもローカル航路の船とは思えない。内装も立派で、日本のクルーズ客船にも負けないほどのグレード。ブリッジのすぐ下には2つのスイート・ルーム。広い専用ベランダを有した造りになっていて、ツイン仕様で、シャワー、トイレ付。この他、いくつかのキャビンも用意され、最近追加料金が必要でもこうしたキャビンを使いたいという乗客も多くなっているとか。ちなみに、スイートの使用料金が2万円、デラックスが1.5万円。2人で使えばその半額となる。ハイグレード化したことが意外に船会社の収益の増大にも寄与しているのかもしれない。アメニティの改善は全国の離島航路船の共通の目標であろうが、これほど徹底した船は数少ない。船員さんの対応もなかなか親切で感じがよい。ソフト面でも



博多埠頭に停泊する先代の「フェリー太古」級の1隻（写真中央）。1992年10月の撮影。

従来の離島航路船からの脱皮を目指してよう  
だ。

**出港まで** 時間があつたので、ラウンジで同  
航路のイメージ・ビデオを大画面で見た。なかな  
かハイセンスなもので、五島の人々がそのうちに  
そのメロディーを自然に口ずさむようになるの  
かもしれない。

深夜12時、いよいよ博多港を出港。防波堤を抜  
けるまでスイート・ルームの船首ベランダでた  
たずむ。

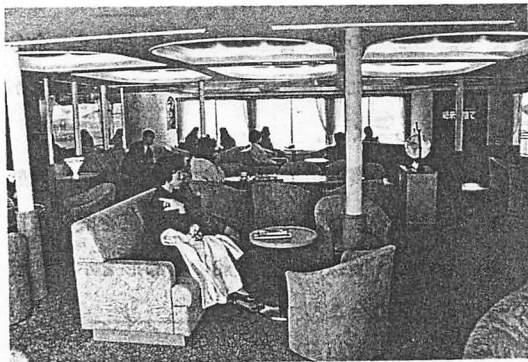
突然錨を入れる音で目がさめた。外はまだ真っ  
暗。宇久か小値賀のようだ。窓から覗くと、ト  
ラックや乗用車が見える。この船の運ぶ生活物資

の受取りであろうか。7時に青方に寄港。空はだ  
いぶ明るくなってきた。青方を出てからがこの航  
海のハイライト。五島列島内の狭い水道を抜ける  
航海が堪能できる。船の揺れもほとんどなく、ク  
ルージングとしてもなかなか魅力的。前方の景色  
の楽しめるラウンジがあれば観光客はより船旅を  
満喫することができそうである。若松、奈留と寄  
港して、朝9時には福江に到着。9時間の快適な  
航海を終えた。

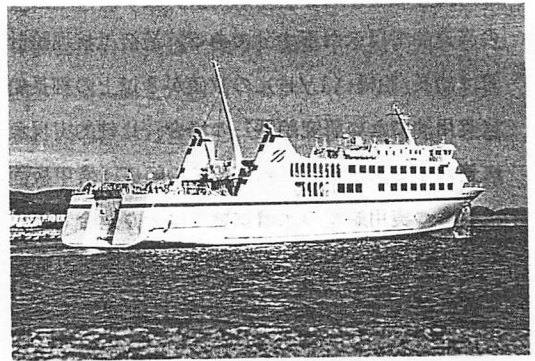
この後、11時20分に「太古」は福江を出港。離  
島の津々をまわりながら、20時25分に博多に到着  
する。1隻で従来の2隻分の活躍をする離島航路  
の選ぐれ物である。



太古



太古のラウンジ



福江港を出港する太古